

### ベルクソンをめぐって：『道徳と宗教の二つの源泉』第四章の読解

ABIKO, Shin / 安孫子, 信

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2022-12-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030897>

# ベルクソンをめぐる

——『道徳と宗教の二つの源泉』第四章の読解——

安孫子 信

オーギュスト・コントとアンリ・ベルクソンは哲学史上で水と油の関係に置かれます（スピリチュアリズムと科学主義）。ただ両者の遠さは近さを潜り抜けてのものです。革命（コント）と戦争（ベルクソン）が問題です。革命に向けたコントの〈進歩〉と〈秩序〉という処方箋を、戦争に直面してベルクソンは書き換えます。ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』第四章の読解をコントから始めて行っていききたいと思います。

## 1・1 オーギュスト・コント

コント（一七九八—一八五七）は、フランス革命の余燼

の中で生まれました。政治の大激動期、彼は社会の混乱は知の混乱から生じていると見なし、新たな社会科学（社会学）によって知の体系化を果たし、社会の混乱に終止符を打とうとしました。それは『実証哲学講義』全六巻（一八三〇—四二年）に示されます。ただこの数千ページに及ぶ大著は今日ではあまり読まれません。アランは「コントに対する忘恩はわたしたちの時代の一般的な事実であるが、それは主としてかれの学説が人の決して無視しえないような学説に属するということから生じている」（『イデー』）とします<sup>1</sup>。アランは、コントの哲学が今日読まれないのは、むしろその成功によると見なすのです。その成功とは、形而上学を実証哲学へと転換させたことを指し

ます。

## 1・2 形而上学が生む知のアーナーキーと実証哲学

社会の混乱を生む知の無秩序、それは形而上学から来ています。形而上学は、デカルト哲学がそうであるように、①〈絶対的真理〉を②〈純粋な理性〉によって求めようとします。コントはこの知の枠組を批判します。

①〈絶対的真理〉—現象は多様で複雑です。それでもそこに〈絶対的真理〉を言うためには、複雑さの一面を、あえて取り立てて、絶対と主張する他ありません。〈絶対的真理〉はこうして「恣意的」にとどまります。(水(タレス)を選ぶか、空気(アナクシメネス)を選ぶか)。

②〈純粋な理性〉—このような真理を唱える哲学者は、〈純粋な理性〉を標榜します。それは偏らない普遍的理性です。しかし多くの場合、哲学者は健康な成人男性であり、そこでは、病者、老人、女性の視点は排除されます。〈純粋な理性〉は普遍的ではなく「個人的」にとどまります。

こうして、形而上学は「個人的」な〈理性〉を「普遍的」<sup>1</sup>とし、「恣意的」な〈真理〉を「絶対的」<sup>2</sup>とします。

そのとき〈普遍的な理性〉の間で、また〈絶対的な真理〉の間で、対立は避けられないことになるでしょう。

このような形而上学に代わる哲学を、コントは歴史的・社会的事実としての「諸科学の成功」から得て来ようとしてきました。科学は、①絶対的に一挙にはなく、時間とともに徐々に形成されます(相対的)。また、②一人ではなく人と共に分業によって形成されます(共同的)。この事実に基づき主張されるのが実証哲学です。コントは「ここ三世紀に固有なあらゆる偉大な科学的業績が自然に働き合うことによって、この哲学は準備されてきた」(『実証精神論』)とします。<sup>2</sup> 実証哲学は科学を基礎付け、批判もせず、歴史的・社会的事実としての「諸科学の成功」を全面的に踏まえ、そこから生まれます。<sup>3</sup>

## 1・3 実証哲学の二つの法則

コント社会学は「諸科学の成功」に伴う「徐々に」(相対的)と「共に」(共同的)という歴史的・社会的事実から、二つの法則を導きます。

①人間の知識は、(1)「神学的」、(2)「形而上学的」、(3)「実証的」と呼ばれる三つの状態を経て進歩する。これを「三状態の法則」と呼びます。

②人間の知識は、扱う現象の単純さ複雑さに応じて、(1)「数学」、(2)「天文学」、(3)「物理学」、(4)「化学」、(5)「生物学」、(6)「社会学」の六科学に分かれる。これを「分類の法則」と呼びます。

この二つの法則は科学の(進歩)と(秩序)に対応しており、それぞれ、形而上学の〈絶対的真理〉と〈純粹な理性〉に取って代わることになります。

### ①「三状態の法則」

人間精神は、(1)「神学的」、(2)「形而上学的」、(3)「実証的」の三状態に應じて、それぞれ、まず(1)「神々」、ついで(2)「抽象概念」、最後に(3)「法則」に依拠して現象を説明しようとします。ここで重要なのは、三状態はそれぞれ理論的に独立しており、互いを絶対的に否定しないということです。コントは「アポロンやミネルバの非存在を理論的に証明したものはなかった。しかし人々はいつの間にかそれらを信じなくなった」(『実証精神論』)と指摘します。<sup>4</sup>つまり、三状態のそれぞれは「時宜」を有しており、その限りで有効です。子供が「サンタ、サンタ」と言うのは真つ当ですが、大人が「サンタ、サンタ」と叫べば不適切です。命題は「神学的」か「形而上学的」か「実証的」かという「時宜」を持ち、端的に真や偽であることをやめます(「サンタクロスはいる」は神

学的命題であり、単に偽命題なのではありません)。(絶対的真理)はなくなりませす。

### ②「分類の法則」

「分類の法則」が列挙する、(1)「数学」、(2)「天文学」、(3)「物理学」、(4)「化学」、(5)「生物学」、(6)「社会学」の六科学は、扱う現象の単純さ複雑さに応じて順に並べられており、歴史的にも、この順に成立して来ると主張されます。ただそのとき、後行の科学は先行の科学に依存はするが、決して還元はされません。六科学はともに実証科学として、「方法の統一と理論の同質性」を持ちますが、互いに独立なのです。こうして、物理主義である、生命主義である、諸科学を一科学に還元する立場は退けられます。とくに普遍数学は退けられ、従って(普遍的理性)も退けられます。コントは「まともに自然を探求すれば、それはわれわれの知性が欲するほどには結びついたものになっていないことがわかる」(『実証精神論』)と述べます。<sup>5</sup>

## 1・4 コントの仕事

こうしてコントは二法則によって(絶対的真理)と(純粹な理性)を廃棄し、形而上学を退場させました。人間が

発するどのような命題も、六科学のどれか一つに属する現象について、三状態のどれか一つに属する仕方です。語っているのであり、端的に偽であることはありません。(絶対的真理)もなく、果てしない論争という知のアナーキーもなくなりません。大文字の「真理」と「理性」がこうして退場し、代わりに一九世紀、哲学が語るのは歴史(進歩)と構造(秩序)ということになります。

## 2・1 アンリ・ベルクソン

ここからベルクソン(一八五九—一九四一)『道徳と宗教の二つの源泉』(一九三二)第四章「最後の指摘——機械主義と神秘主義」の読解に入ります。『二源泉』が直面しているのは、第二次世界大戦前夜のヨーロッパです。問題は革命ではなく戦争です。そこまでにベルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論』(『試論』と略、一八八九)、『物質と記憶』(一八九六)、『創造的進化』(一九〇七)を著しています。それらは持続や生命を扱うものですが、すべてで結局は社会が問題であったと言えらるでしょう。

改めて、第四章では戦争が問題です。人類は太古から戦争を続けてきました。それを認め、これまでの「征服の

ための征服」といった「偶発的な戦争」と区別して、ベルクソンは「今日の戦争」を「本質的な戦争」と呼びます。それは自己保存を旨とする「閉じた社会」の本質にかかわる戦争です<sup>6</sup>。そのような戦争を乗り越える可能性を、ベルクソンは、コントの実証哲学の(進歩)と(秩序)の主張を見据えて探っていたと考えられます。以下では、そのような観点から第四章を扱っていきます。

## 2・2 ベルクソンと実証哲学

ベルクソンは普通は、実証哲学と対決したスピリチュアリズムの流れに置かれます。しかし、生物学の哲学のジャン・ガイヨン(一九四九—二〇一八)は次のように述べています。「ベルクソン哲学は、一九世紀の半ば以降「科学の哲学」と呼ばれてきた哲学の枠外にあつて、なお実証科学と本質的な関係を維持した二〇世紀哲学のうちの一つである<sup>7</sup>」。

ベルクソン自身の言葉からもそれは確かめられます。ベルクソンは「私が来るべき形而上学に見るのは、その流儀が経験的であり、前進的であり、他の実証科学と同様に、実在の注意深い研究の結果得られた最新成果を、暫定的のみ決定的なものとして示すよう強いられているよう

な科学である」として、自らの哲学を「実証的形而上学」と呼びます（『心理・物理の平行説と実証的哲学「形而上学」』）。さらにベルクソンは、「どのような哲学も、実証主義でさえ、実証科学をこれほど高くは置かなかった」とさえ述べます（『緒論』）。

## 2・3 ベルクソンとコント

以上を念頭に置いて、さらにベルクソンとコントの関係を見ていきましょう。ベルクソンによるコントの「分類の法則」への言及があります。そこでベルクソンは「近代哲学の偉大な業績の一つ」としてコントの『実証哲学講義』に触れつつ、「数学から社会学まで諸科学の間にヒエラルキーの秩序を打ち立てるといふ、単純ではあるが天才的なるその考えは、コントがそれを決定的真理として打ち立てて以来、われわれの精神が認めざるをえないものとなっている」（『フランス哲学』）と述べます。ベルクソンはコントの「分類の法則」を「天才的」と評価します。ただ「分類の法則」でベルクソンが注目するのは、それが諸科学を〈秩序〉づける面ではなく、むしろ「諸科学相互の還元不可能性」を主張する面です。<sup>11</sup>

さらに『ラヴェッソンの生涯と業績』では、コントの

「分類の法則」を自分に引きつけて再解釈しています。『実証哲学講義』に触れつつ、ベルクソンは、「最後、最終巻では、生命の諸現象全体が明確に物理・化学的事実から分離される。生命の現象を考察すればするほど、コントは事実の様々な種類の間に、もはや単に複雑さの違いだけではなく、位階や価値の違いをも設定する傾向を強めていった。ところで、この方向に進んでいけば、人が到達するのはスピリチュアリズムなのである」と述べます。<sup>12</sup>

## 3・1 『二源泉』第四章「最後の指摘——機械主義と神秘主義」の冒頭と末尾

以上の確認を受けて、第四章の読解に入ります。まず第三章までに示された「閉じた社会」と「開いた社会」について一言。両者の違いは一言で、前者では、社会も成員も自己保存に縛られているが、後者ではそうでないと言えるでしょう。譬えて述べれば、同じ家から出て歩くでも、通勤は自己保存に縛られているが、散歩はそうではありません。通勤は生活のためで、時間に追われ時計を気にしつつであり（『機械主義』）、人々は口を結び無言です。他方、散歩は何のためでもなく、理由なくいつまでも歩いていたいとさえ思われており（『神秘主義』）、知らない者同士が

思わず言葉を交わします。

さて、第四章は戦争をこの二つの社会から論じます。まず冒頭での問題提起。「われわれが行った分析の成果の一つは、社会に関する領域において、閉じたものから開かれたものを徹底して区別したことであった。閉じた社会とは成員が相互に支え合う社会であり、彼らは自分たち以外の人間たちに無関心で、つねに攻撃か防御の態勢を取っており、要するに戦闘的な態度を取ることを強いられる<sup>13)</sup>」。「閉じた社会」は自己保存の体制を整えており、戦闘態勢にあると指摘されています。つまり「閉じた社会」では戦争が不可避であること、これが問題です。

次は末尾の一節。「人類は自分がなしたけた進歩の重さで半ば押し潰されてうめき苦しんでいる。人類は自分の将来が自分次第であることが十分にわかっていない。第一に、今後とも生き続ける意志があるのかどうか。それを確かめる責任は人類にある。第二に、ただ生きることが望むのか、それとも、ただ生きることに加えて、神々をつくり出す機械たる宇宙の本質的な機能が、反抗的なこの地球でも果たされるのに必要な努力を払うことを欲するのかどうかを考えてみなければならない<sup>14)</sup>」。これは冒頭の問いへの応答です。戦争回避の可能性、つまり、「閉じた社会」から「開いた社会」への道筋が示唆されています。

#### 4・1 ベルクソンにとっての「分類の法則」

以上の議論を、コントの二つの法則に対するベルクソンの態度を見定めてそこから見ていこうと思います。まず、科学の分類について、少し長いですが、改めてベルクソンが語る言葉の確認です。「かつて純粹数学から出発した実証科学は、力学を通り、物理学そして化学を通り、遅れて生物学に到達した。初期の領域は実証科学の得意領域であり続けたが、それは不活性の物質の領域である。「ところが」有機物の世界では実証科学はそれほど安んじてはおられない。その世界で実証科学が確かな足取りで進みうるとすれば、それは物理学や化学に頼る場合だけである。実証科学は、生物にあって固有に生命的なものではなく、むしろ生命現象にあって物理・化学的なものに結びつくのである。しかし、「さらに」精神に到達して、実証科学の困惑は大きい。実証科学は精神について何らの知識も得られないというわけではない。そうではないが、精神と物質との境界線を離れるにつれて、それだけ得られる知識があまりになるのである。この新たな地帯では、古い地帯においてのように、ただ論理の力に頼っているだけでは前進できない。ここでは常に《幾何学の精神》から離れて《繊細

の精神』に訴えていかなければならないのである」(『緒論』<sup>15</sup>)。

内容的に、ベルクソンはここでコントの「分類の法則」をなぞっています。ただ、「分類の法則」が諸科学相互の独立を認めつつも、六つの科学で科学の体系を閉じているのに対して、ベルクソンは、諸科学相互の差異を強調し、とくに、「物質」の科学に対して「精神」の科学の独立を主張します。パスカルに従い、違いを認めない「幾何学の精神」ではなく、違いに気づく「繊細の精神」を引き合いに出します。科学は体系で閉じません。

#### 4・2 科学の〈閉じた〉分類と「閉じた社会」

以上を踏まえて、第四章では、〈閉じた〉分類が「閉じた社会」に結び付くことが主張されます。精神科学を物質科学へと還元しようとする知性が問題です。「人間的知性が魂に目を向けるや否や、人間的知性は内的生の空間的表象を与える。…そこから、意識の諸状態の相互浸透を考慮しない原子論的な心理学の数々の誤謬が生じる。…魂と身体(脳)の関係はどうか。…実際、心的活動の物質的随伴物が心的活動そのものの等価物であるということが前提的理解とされるまでになっている。…このような(知性の)

主張は単なる形而上学的な仮説であり、諸事実についての恣意的な解釈に過ぎない」と言われます。<sup>16</sup>

「内的生」(例えばメロディ)を「空間的表象」(例えば楽譜)に化し、「心的活動」(心)を「物質的随伴物」(脳)の「等価物」に化すことは、本来の「分類の法則」を否定し、「精神科学」を閉じ、「物質科学」だけで済まそうとすることです。それは「玩具で楽しむこと」…、蜃気楼の周りでもがくこと」に喩えられます。<sup>17</sup> 何でもレゴ(物質)で作れると思うのは子供じみたこと(「玩具」)であり、幻想(「蜃気楼」)です。ただそれは楽しいことです。それは「快楽に執着し、快楽に目を向けること」です。<sup>18</sup> なぜなら、そこでは人間は、物質の自己保存(慣性)に自らを預けて、自らの自己保存(楽)を助長させているからです。ただこうした自己保存への固着は、他者に対しては戦闘の態度を取らせません。レゴで遊ぶ子供は他の子供が自分のピースに手を出すことを許さないう。さらには、他の子供のピースをねたみそれを奪いたいとさえ思うでしょう。科学の〈閉じた〉分類は人間を戦争に導きます。

#### 4・3 科学の〈開いた〉分類と「開いた社会」

ここでベルクソンは自分のそれまでの仕事(『試論』や

『物質と記憶』に言及して、本来の「分類の法則」を語ります。物質科学とは別に精神科学を考えなければなりません。「心において意識の諸状態は相互浸透し持続している。：精神活動はなるほど物質的な随伴者（脳）を持つが、この随伴者は精神活動の一部分しか描いていない。残りの精神活動は無意識の状態にある。：要するに、われわれの脳は表象の創造者でもその保存者でもないのだ。脳は単に、表象が効力を持つて働くようにそれを制限するだけである」<sup>19</sup>。意識の状態についてのメロディの喩え（切れ目はなく空間化できない）や、心と脳の関係についてのコートとコート掛けの喩え（コート掛けにコートは依存、しかしコート掛けをいくら調べてもコートはわからない）が知られています。

この〈開いた〉分類は「開いた社会」につながります。精神科学の例として「心霊科学」が引かれますが、この科学は「心霊経験」に向かい、「来世信仰」をも含む「広大な未知の大地」を扱って、われわれに「歓喜」（自己保存を超える）をもたらし、「快樂」（自己保存に留まる）を覆い隠すと言われます。<sup>20</sup>いささか唐突な議論ですが、ただ「来世信仰」を（いつまでもという）ことが信じられていることとすると、上で使った例、早く終えたいと思われる通勤に対する、いつまでも歩いていたいという散歩

の際の心情が思われます。通勤が自己保存に縛られているとして、疲労もいとわぬ散歩は自己保存を脱しています。通勤では人間は座席争いをしますが、散歩では見ず知らず同士が挨拶をします。特段の理由もなく行われる散歩にあえて「神秘性」を言い、そこで感じられる喜び（「歓喜」）をあえて「心霊体験」と呼べばですが、その神秘主義は「開いた社会」を招来しています。

## 5・1 ベルクソンにとつての「三状態の法則」

次にコントの「三状態の法則」において、ベルクソンの主張を見てみましょう。ベルクソンは「進化」を語りますが、「進歩」はほとんど語りません。彼はむしろ反進歩を主張します。「自然の素地は、そうした獲得物によって大部分覆われていよう。しかし素地は決してなくなつたわけではない。幾世紀を通してほとんど変わることなく残っている。：われわれの文明社会と、じかに自然の手で決められた社会とは、よしどれほど違つていようと、前者が後者との根本的類似を示していることは事実なのである」<sup>21</sup>。また、「原始人」たちの知性は本質的にはわれわれの知性と異ならない。彼らの知性はわれわれの知性と同じように、動を静へと変換し、作用を事物へと凝固させる傾向を持

つ」と言われます。さらに、「人間はいつの時代にも機械を發明してきたし、古代にも驚くべき機械があつた」<sup>22)</sup>。こうして、ベルクソンは、知性においても技術においても原始人と文明人の間に差はないと主張します。

また、『二源泉』が全体で示していることは、道徳も宗教も、ともに知性の付随物だということです。知性は本来不完全で、必ず同時に宗教（静的宗教）によって補われなければならぬと主張されます。「唯一理性を備えたものたるホモサピエンスは、非合理的な諸事象にみずからの生存を依存させる唯一の存在」であつて、「宗教をもたなかつた社会はかつて一度も存在しなかつた」と言われま<sup>23)</sup>す。知性的人間が「閉じた社会」を構成しますが、そこには必ず「静的宗教」が伴います。コントの「三状態の法則」に反して、「神学的」（宗教）と「実証的」（知性）は同時であるということになります。

## 5・2 〈進歩〉と「閉じた社会」

原始人と文明人に本質的な違いはないとして、それでも両者が分かたれるとすれば、それはなぜなのか。ベルクソンは「文明化せざる者たちに欠けていたのは、優越した人間では恐らくなく、むしろ、このような人間が優越性を示

す機会、彼に統こうという他人の意向である。しかし、社会がその道に入るためには、敵の部族に新型の武器が現れて生じるような、絶滅の脅威がおそらくなければならぬ」と述べます<sup>24)</sup>。つまり、原始人と文明人の差を言うとして、その背後にあるのはただ、「絶滅の危機」があつたか否かということになります。それを勝ち抜いたということ、ただそれが「文明的」ということなのです。こうして、「科学が進歩する調子を考えれば、交戦国の一方、取つておきの秘密を所有する方が、他方を壊滅させる手段を手に入れる日が近づいている」とも指摘されます<sup>25)</sup>。

こうして〈進歩〉とは、あるとすれば、それは「閉じた社会」の〈閉じ〉の度合いが増すこと以外の何ものでもないのです。〈閉じ〉の度合いが最大になれば、そのとき他の社会は絶滅させられます。〈進歩〉は絶滅を背景にした「閉じた社会」。同士の競争での勝ち負けを表す言葉ということになります。だから、〈進歩〉はそれだけで、われわれを「半ば押し潰す」のです<sup>26)</sup>。

## 5・3 〈進化〉と「開いた社会」

こうして、ベルクソンによれば、人間社会は、コントの「三状態」のいずれにおいても〈閉じて〉います。その限

りそこに〈進歩〉はありません。ただ、コントが「三状態」を互いに独立と見ていた点は評価、踏襲されます。ベルクソンは「閉じた社会」の先に「開いた社会」を置き、前者から後者への〈進歩〉ではなく〈創造的進化〉を言うこととなります。「閉じた社会から開かれた社会へ、都市国家（シテ）から人類への移行は、拡張の道を通しては決して行われぬ。それらは同じ本質を持たない」とされます<sup>28</sup>。このとき、コントの「三状態の法則」は「二重狂乱の法則」に置き換えられていきます。

## 6・1 戦争

「閉じた社会」においては戦争は「自然的」でした<sup>29</sup>。しかし、「閉じた社会」は「開いた社会」に〈進化〉しえて、そのとき、戦争は回避されていきます。しかし、それはどのようにしてなのでしょうか。この点についての第四章の議論は、意外な言明から始まります。「開かれた社会は、人類精鋭の数々の魂に断続的に夢想され、創造される度に自分の持つ何ものかを実現する。…しかし、一時的に開かれた円環も、各々の創造がなされた後につねに閉じてしま<sup>30</sup>う」。つまり、〈開く〉ことが問題なのに、〈開いた〉ものは必ず〈閉じる〉ということがまず言われるのです。ただ

これは、〈閉じた〉ものが、実は、まずは〈開いて〉いたということを使うためなのです。つまり〈開き〉がまずあったのです。ですから、〈改めて〉〈開く〉には、起源の〈開き〉にさかのばればよいということになります。ここから「二重狂乱」が示されて来ます。

## 6・2 「二重狂乱の法則」

〈開き〉を「推進力」、〈閉じ〉を「停止力」として、この二傾向について、「傾向が二つであるなら、人が特に執着するのはまず二つのうちの一方の傾向である。この傾向とともに、人は…総じて可能な限り遠くへと進む。次いで、この進展の途中で獲得したものを携えて、後方に置いてきたもう一方の傾向を探しに戻る。今度は最初の傾向を無視してこの傾向を発展させるのだが、この新たな努力は、…最初の傾向を再開し、それをもっと遠くまで押し進めるまで継続される」と言われています<sup>31</sup>。二つの傾向のうち一方への傾き（第一の「狂乱」）が、やがて反動で揺れ戻って、もう一方への傾きを生む（第二の「狂乱」）、それが繰り返されるのです。これは一種の振り子運動ですが、それぞれの揺れは「記憶」され、そこにはその分の前進が生じます。ですから、それはむしろらせん状の上昇運

動となります。その限りでこの「二重狂乱」は、繰り返してはならず、「創造的進化」であって、物質に対する生命の進歩を示しています。起源にあった生命は有限で、限りなく「前進」しえず、「停止」して物質化せざるを得なかったのですが、その物質は、本来「前進」である生命がただ「停止」しているだけのものであって、また「前進」するのです。「前進」と「停止」の間のこの「二重狂乱」は、「開いた社会」（生命）と「閉じた社会」（物質）の間にも生じます。

### 6・3 機械主義と神秘主義

「閉じた社会」は「ある生活水準の維持」（自己保存）のために「自然的」に戦争に向かうとされてきました。現代において「生活水準」を決定するのは産業です。「先の戦争（第一次世界大戦）」はというと、…将来に漠然と予見される戦争と共に、われわれの文明の産業的性格に結ばれている」と指摘されます。すなわち、「長い間、産業主義と機械化は人類を幸福にすると理解されてきた。…人類がこれほどまでに快楽、贅沢、富を渴望したことはかつて一度もなかった。…（今も）抗しがたい力が人類をその最も卑俗な欲望の満足へと…荒々しく向わせている。…」<sup>33</sup>。この

「欲望の満足」、すなわち、産業主義を通じての自己保存の追求には、「虚栄心」（他人と同じものが欲しい）が混じりこんでおり、「狂乱」をなします。しかし、そうであるから、「虚栄心」が去れば「欲望」も、穴が開いた風船のように、一挙に消失するとも指摘されます（大航海時代の胡椒への「狂乱」の例<sup>34</sup>）。

対するもう一つの「狂乱」、それが生命の推進力に従う神秘主義です。それは禁欲的で、「欲望の満足」という自己保存の方向とは真逆に、自己が変わることをいとわないものです。機械を人間の身体の拡張、内にある生命の推進力を魂とすれば、改めてまず、「この途方もなく肥大した身体をなかで、魂はというと、…今、その身体を満たすためにはあまりに小さい。このような事態から、身体と魂のあいだに空隙が生まれ、社会、政治、国際関係に係る恐ろしい諸問題が生じる」とされます<sup>35</sup>。これは身体の「狂乱」の状態です。それに伴う「空隙」を埋める必要があり、埋める方向へもう一つ、第二の魂の「狂乱」が生ずるといわれます。ここでこの禁欲主義は機械主義を無しにはせず、むしろ前提にしています。神秘主義は「飢えの恐怖に捉えられた人類の間には伝播されない。…（まず）神秘主義が機械主義を呼び出す」（第一の「狂乱」）のですが、しかし、「（今や）神秘主義は機械主義を呼び求めると言うだ

けで済ますわけにいかない。拡大された身体は魂による補完を待望し、機械主義は何らかの神秘主義を要請する」(第二の「狂乱」とベルクソンは述べます。<sup>36</sup>)

## 6・4 単純な生への回帰

機械主義が「複雑」への道だとして、神秘主義は「単純」への道です。そして「単純な生への回帰<sup>37</sup>」ということでベルクソンがあげるのが、「近い将来自動車は今のようにはや欲しがられなくなることもありうる<sup>38</sup>」といった話です。しかし、自動車から自転車へということ、これが仮に「機械主義によってこれまで以上に大地へと屈曲させられた人類が、機械主義を通して身を起こし、天を眺める<sup>39</sup>」ことに当てはまるとしても、「科学の進歩によって、交戦国の一方が他方を壊滅させる手段を手にする日が近づいている<sup>40</sup>」とも言われる事態の切迫に、この「回帰」はあまりに悠長に見えます。

これに対しては、ベルクソンは第一の「狂乱」をむしろ踏まえて、一見、樂觀的に次のように説きます。「物質的障害はほとんど消滅した。明日になれば道は開くだろう。この道は生を導き、生をそれが停止せねばならなかった点へと至らせた息吹の方向そのものへ向かう。そして、英雄

の呼びかけが到来する。：われわれは進むべき道を知るだろう。：旅を再開する際には、すでに欲していたことを改めて欲するだけでいい。説明を要するのはつねに休止であって運動ではない<sup>41</sup>」。戦争からの脱却、すなわち、「単純な生への回帰」のためには、英雄に従い、「(ただ) 欲するだけでよい」と言うのです。ただこれは次のように言い換えられます。「人類が変容するのは、人類が自ら変容を欲する場合だけである<sup>42</sup>」。「回帰」するには「欲するだけ」でよいとしても、それは「自ら欲する場合だけ」に限られる。第四章は「自ら欲する場合」というまさにここに問題のすべてがあることを指摘して終わります。「今後とも生き続ける意志があるのかどうか。それを確かめる責任は人類にある<sup>43</sup>」。問題は解かれています。しかし、問題はまったく解決していないのです。

文明の問題に対して、コントは近代科学の達成の中から、「秩序」と「進歩」という処方箋を導きました。それに対してベルクソンは、同じ達成から差異化されてくる〈精神科学〉と、その達成を越えてさらに創造へと進む〈神秘主義〉とを、処方箋として置いたと言うことができるとでしょう。これがここまでの検討のひと先ずの結論の言葉となります。

《註》

- (1) Alain, *Idées, Introduction à la philosophie*. Platon, Descartes, Hegel, Comte, 1983, Flammarion, p. 271.
- (2) Comte, *Discours sur l'esprit positif*, 1974, Vrin, p. 1
- (3) ニーチェは科学の基礎づけ(デカルト)や批判(カント)と異なるこの点を、<sup>1)</sup>「科学的方法の歴史は、<sup>2)</sup>「コメントによつてはたゞ哲学自身で見なされた」(「力への意志」467)と指摘<sup>3)</sup>する。
- (4) *Ibid.*, p. 67
- (5) *Ibid.*, pp. 35-36
- (6) Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008, PUF, p. 305 (スルタン「道徳と宗教」の「源泉」(合田正人・小野浩太郎訳)「2015年」ちくま学芸文庫、p. 395)。以下では、原著にDS、訳書に『「源泉」』の略記を用います。訳文の引用では所々で変更を加えました。
- (7) Jean Gayon, « Bergson entre science et métaphysique », *Annales bergsonniennes* III *Bergson et la science*, 2007, PUF, p. 189
- (8) Bergson, *Mélanges*, 1972, PUF, p. 480
- (9) Bergson, *La pensée et le mouvant*, 1969, PUF, p. 71
- (10) Bergson, *Mélanges*, pp. 1168-1169
- (11) *Ibid.*, p. 1177
- (12) Bergson, *La pensée et le mouvant*, p. 274
- (13) DS p. 283<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 367
- (14) DS p. 338<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 436
- (15) Bergson, *La pensée et le mouvant*, p. 34
- (16) DS pp. 334-336<sup>1)</sup> 『「源泉」』 pp. 430-432

- (17) DS p. 333<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 430
- (18) DS p. 338<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 436
- (19) DS pp. 334-335<sup>1)</sup> 『「源泉」』 pp. 431-433
- (20) DS pp. 337-338<sup>1)</sup> 『「源泉」』 pp. 435-436
- (21) DS p. 25<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 38
- (22) DS p. 134<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 175
- (23) DS p. 324<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 419
- (24) DS pp. 105-106<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 140
- (25) DS p. 180<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 236
- (26) DS p. 305<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 395
- (27) DS p. 338<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 436
- (28) DS p. 284<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 368
- (29) DS p. 303<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 392
- (30) DS p. 284<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 368
- (31) DS p. 314<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 406
- (32) DS p. 307<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 398. なお、( )内は以下を含め引用する。
- (33) DS p. 310<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 402
- (34) DS p. 323<sup>1)</sup> 『「源泉」』 pp. 417-418
- (35) DS pp. 330-331<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 426
- (36) *Ibid.*
- (37) DS p. 320<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 414
- (38) DS pp. 323-324<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 418
- (39) DS p. 331<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 427
- (40) DS p. 305<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 395
- (41) DS p. 333<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 429
- (42) DS p. 311<sup>1)</sup> 『「源泉」』 p. 402

(43) DS p. 338 『源泉』 p. 436